

学校名	丹波市立 柏原中学校
-----	------------

○目標・方針

<p>中期的な学校運営の目標・方針</p> <p>《学校教育目標》 『心豊かにたくましく、自立して生きる生徒の育成』～学び合い、支え合い、鍛え合う～ 《めざす生徒像》 ①学んだことを活かせる生徒 ②自治的な集団づくりを通して成長する生徒 ③目標をもって努力する生徒</p>	<p>本年度の重点目標</p> <p>①基礎基本の学力を定着させ、学んだことを活用する力を育てる。 ②自治活動を高め、人との関係づくりを通して自立する個を育てる。 ③目標をもって生徒が取り組み、それを支援する環境を整える。</p>
--	---

○自己評価

○学校関係者評価

領域	評価の観点	評価項目	達成状況	取り組み状況と改善の方策	自己評価の各観点に対する評価
学校運営	学校経営	家庭・地域との連携と信頼される学校づくり	B	<ul style="list-style-type: none"> ホームページの更新を定期的に行い、学校での生徒の様子や行事の様子を伝え、家庭や地域に発信した。また、学校だより、生活指導通信、学年・学級通信、学校安心安全メールを通して、適時適切に情報提供することができた。 保護者との連携は、生徒の気になる様子やその時々の問題、学校の出来事を丁寧に伝えながら、その課題を保護者と共有していくことが大切である。今後も保護者との連携を深め、相談しやすい学校となるための体制をつくっていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページの更新が昨年度に比較して積極的に進められていたため学校の様子を知ることができた。 保護者への連絡をペーパーレスにして学校安心安全メールをさらに活用することが大切である。
		業務改善の推進	B	<ul style="list-style-type: none"> 個々の生徒への対応と学年全体に対する教育の質の維持、向上や教職員一人一人の能力向上を図りながら「働き方改革」を推進する。 部活動は、これまでの週2日以上以上の休業日である「ノ一部活デー」を設定して行った。新型コロナウイルス感染拡大防止のために部活動ができない日も多かった。数年後の社会体育への移行を見据えて、部活動の在り方と教職員への負担軽減について協議を続けていく。 教職員が心身とも健康に働けるように自分の退勤時刻ボードを活用し、タイムマネジメントを意識しながら超過勤務時間の縮減と定時退勤日に可能な限り定時で退任できるように取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動の朝練廃止や家庭訪問の廃止など生徒、保護者は肯定的に受け止めているが学校の意向を大切にしながら対応してほしい。 働き方改革はどんどん進めなければならないが、生徒にとって自分の時間が増えることでその時間が有効に使えればよいが、できない場合もあるので指導する必要がある。
	生徒指導	生徒自らが考え行動し評価する自治活動の推進	B	<ul style="list-style-type: none"> 校内ではあいさつをしっかりとできる生徒が多いが地域では声が小さくなったり、あいさつできなかったりする生徒が多いと聞いている。生徒会があいさつ運動を行っており、生徒自身は約96% (R2年度 95%) の生徒があいさつはできていると考えている。 コロナ禍ではあるが地域ボランティア活動に生徒会の呼びかけで活動することができた。次年度以降も関係機関と連携しながら、生徒が主体的に参加できるボランティア活動に取り組むようにしていく。 自治活動(生徒会、委員会、学級活動)に積極的に取り組んでいると回答する生徒の割合は74% (R2 75%) であった。ここ数年で肯定的回答が微減している。新型コロナウイルス感染拡大防止のために十分な活動ができなかったことが影響している可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> あいさつはできる生徒とできない生徒の差がかなりあると感じる。勉強や部活動、生徒会活動等自分に自信が持てる体験の積み重ねをしてほしい。 生徒の自己肯定感が全体的に低いように感じる。学校生活や地域活動で自分に自信が持てるような取り組みを推進する必要がある。ボランティア活動についてはそのメリットを十分に伝え、積極的に参加できるように指導してほしい。
全職員の共通理解による組織的な生徒指導の推進		B	<ul style="list-style-type: none"> いじめはどんなことがあっても許されないと答えた生徒は97% (R2 95%) であった。「いじめを許さない学校風土」をつくるために、いじめを自らの問題として受け止め、主体的に考えて行動できる力を育成するために個々の生徒の学校生活の様子を観察したり、やりとり帳の内容から個々の生徒の様子を把握したりしながら毎日の声掛けを通じていじめの未然防止、早期発見に努めている。 交通ルールを完全に守っていると94%の生徒が答えている。社会や学校生活のルールについてルールの守れる生徒や自分たちのルールを自分たちで考えることができる生徒の育成に努めるために生徒の実態に合った指導を適時行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめは絶対に許さない」という校風づくりに教職員一丸となって取り組んでほしい。また、困った時に友だちや先生、家族に話すことができる日頃からの関係づくりをしてほしい。 自転車通学の様子やあいさつの様子から学校が落ちているように感じる。 	
教育課程	学習指導	学力向上のためのわかる・できる授業づくり	B	<ul style="list-style-type: none"> すべての教師がICT機器を活用しながら授業を行えるように研修を推進している。様々な理由で休まなければならないようになった生徒に対して学びを止めないようオンライン授業を5教科中心にすることができた。 どの生徒にとっても安心してわかりやすい授業を推進し、一人一人の生徒の困り感に対応した指導を全教職員で行った。生徒からの「授業をよくするアンケート結果」を生かしながら授業改善に取り組んだ。次年度以降も継続して行っていく。 効果的な学び合いのためにペアワークやグループワーク、教え合い、小グループ学習などをどの授業でも行っている。また、生徒が話法を使って発言する機会を多く取り入れている。教師はタイミングよく子どもをほめること(評価言)により生徒のやる気を引き出すように取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業のユニバーサルデザイン化の取り組みが一人ひとりの生徒の困り感に寄り添った指導につながっていると感じる。 タブレットのより良い活用やオンライン授業などICT機器の活用ができていて更に活用してほしい。 授業で分からなかった場合にその後の生徒の行動が学年により差がある。わからないことをそのままにしておく生徒がないように個別指導で対応してほしい。
		家庭学習習慣の定着を図る取組	C	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が自主的に家庭学習をしていると答えた保護者は約52% (R2 50%) である。出した宿題を忘れずにしている生徒は76% (R2 80%) であり、昨年度よりも4ポイント減った。家庭学習をいかに取り組ませるかはこの数年の大きな課題である。宿題に継続して取り組ませつつ、自主的な学習ができるように指導する必要がある。 家庭でのICT機器の使い方について、けじめをつけて活用している生徒は67%、保護者は32%であり生徒と保護者の使用状況の認識に大きな差がみられる。ICT機器の利用時間の増加が家庭学習の時間の妨げになっているとも考えられる。今後、保護者と連携しながら指導する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習の大切さを生徒と保護者に伝えながら、保護者との連携を深めて取り組む必要がある。 タブレットが「家庭学習にどれだけ活用されているのか。」生徒と保護者で大きな意識の差がみられる。保護者は学習よりも他の事で使っていることが多いと考えている。
課題教育	特別支援教育	個に応じた計画的な特別支援教育の推進	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の情報交換を職員会議や特別支援教育推進委員会で行い、全教職員で組織的に支援しながらインクルーシブ教育を推進する。また、一人ひとりの生徒の授業や学校生活での困り感を共有しながら生徒に寄り添った指導を展開する。 「合理的配慮」に基づく支援計画や指導計画を作成し、計画的な支援を行う。 1年時から卒業後の進路を見据え、3年間で計画的な進路指導を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> こども園、小学校、中学校、高等学校・特別支援学校高等部や関係機関と連携し、横のつながりを活かした指導を今後も継続してほしい。

※領域 (3領域) 学校運営、教育課程、課題教育 ※評価の観点例 (網羅するのではなく、各学校で観点を絞る)

領域	観点例
学校運営	学校経営、組織運営、生徒指導、教職員の育成、危機管理、安全管理、保護者・地域住民との連携、施設設備 等
教育課程	学習指導、道徳教育、総合的な学習の時間、指導方法の工夫改善 等
課題教育	進路指導、特別支援教育、人権教育、福祉教育、情報教育、食育、防災教育、環境教育 等

※達成状況 A: 優れている B: おおむね良好 C: やや改善 D: 要改善

自己評価の実施方法についての評価

保護者、生徒、教職員のアンケート項目やアンケート回数を見直したり変更したりして適切に対応されている。経年の変化を確認し、アンケート結果を如何にフィードバックして次年度の指導に活かしていくかが大切である。

学校関係者評価を受けての次年度の改善の方向性について

- 様々な教育活動を通じて一人ひとりの生徒の活躍の場を設定し、自己有用感を高める支援を行う。
- 全ての授業で学習規律(柏中スタイル)を確立しながら、一人ひとりの生徒の困り感に寄り添った指導を推進する。
- ICT機器の活用を推進しながら、様々な学習の場面で使えるように指導する。
- 生徒会活動をはじめに自治活動が活発になるように指導する。併せて地域に向けたボランティア活動等の取組を推進する。

令和4年3月10日

学校名 丹波市立柏原中学校
校長名 大槻 芳裕



学校関係者評価のまとめ

生徒の健やかな成長のために保護者・学校・地域がより良く連携しながら、協力していくことが大切である。学校運営協議会での意見交換がより活性化し、学校と地域が協力して学校運営の一助になれば良いと思う。次年度以降は具体的な取組ができるように学校と連携していきたい。